

「信仰・希望・愛」の展開の物語

第三部 福音書伝道から、パウロの福音活動に(その1) 附 福音と福音書

第二部で「マルコによる福音書」に書かれたイエス伝承のごく一部から、イエスの「神の国」宣教のご意図を窺いました。更に他の弟子たち、マタイ・ルカ・ヨハネによる福音書と、ルカの「使徒言行録」があります。発行された目的意識や時期と活動の所在地によって、当然ながら内容にかなりの相違はあるのですが、各福音書がそろって力を尽くして宣べ伝えているのは、イエスの受難—十字架—とキリストの復活の告知です。今回ここに取り上げたいのは、各福音書と、パウロの福音活動との関係です。パウロは西暦62年頃？、ローマで殉教の死を遂げたようですが、それまでに7通の手紙を各地の信徒たちに書いております。また1世紀末前後までにパウロを知る人たちや弟子たちが、パウロの名で6通の手紙を書いています。その手紙の内容をおそらく各福音書の編集者は知っていたでしょう。たとえばマルコはパウロと一緒に伝道旅行をしましたし、ローマでは牢獄に入っているパウロの近くにいました。ルカはパウロの言葉に打たれその言葉に賛同しながら、2世紀初めころ異端者と断定された、熱烈なパウロ主義者マルキオンへの反論にパウロの手紙の内容を用いました。ヨハネ共同体はパウロが成立させた集会と同じ街エフェソを同時期に根拠地としましたので、全然行き来がなかったとは考えられません。だからパウロの強烈な回心経験から生まれた、強い信仰心、理路整然とした文脈などが、福音記者たちに影響を及ぼさなかったとは考えられない。しかし「福音」と云う言葉はパウロに始まったわけではない。イエスの復活後、イエスのご生涯そのものが福音だという事が、弟子たちに確信されて、福音書と名付けられた書物が生まれたのですから。パウロの伝道相手への手紙類は当然、各福音書の編集者に読まれて参考にされていたことでしょう。それでも福音書の創作は当然、編集をしたマルコ・マタイ・ルカ・ヨハネの責任と功績です。

イエスの復活後、エルサレムのキリスト信仰共同体は、ユダヤ教徒からの迫害の中で、ユダヤ人への伝道活動から次第に、異邦人伝道と云う目的に向かって方向づけられて行くようになります。そしてパウロも、ユダヤ人に対するキリスト伝道の志を捨てたわけではありませんが、神からの召命によって対象が殆ど異邦人となり、異邦人への伝道を主な目的とするわけで、代表的な使徒ペテロもまた、パウロと同じような伝道経験——すなわち聖霊による異邦人伝道を、使徒言行録に記載されています。さてこれからパウロの福音活動をご報告しようと思うわけですが、彼の活動を示す手紙類の内容が、あまりに広範なので、その一端、成るべく『さわり』を探して記するようなこととなります。

その前に、

1、イエスの「神の国宣教」と使徒たちの福音伝道の異同について一言。——イエスが「神の国」

について弟子たちを始め、ユダヤの人々に説かれたのは「神の支配はわたしの中に来ているから、わたしを見習って神の愛のみ心に沿って生きなさい。そのように人間がお互いに助け合って平和に生きる世界が『神の国』なのだよ」と自分の生き方を示された。

1、弟子たちは《神がイエス・キリストの生涯の出来事、特に十字架の死と復活のキリストによって、私たち人間の救いを成し遂げられた》、そのことが福音なのだと悟って、キリスト・イエスの出来事(福音)を告知するようになるのです。

2、またエルサレムで五旬節最後の日にあった、使徒たちや信徒たちへの聖霊降臨と、ダマスコ途上でのパウロへの聖霊降臨(と云ってよいかどうか?)いや、生けるキリスト・イエスから下された、パウロへの召命《使徒言行録やパウロ書簡を参照してください》、それが聖書に記載されている事実であることを、ご確認願います。

「福音」の内容を説明する言葉を聖書の中から探すとするれば、色々大切な言葉を見出しますが、まずパウロの使徒性について、聖書はどう云っているか?

「キリスト・イエスの僕、神の福音のために召し出され、召されて使徒となったパウロから」(ローマ書1;1)。使徒(アポストロス)と云うのは、ある事柄を伝える為に神から遣わされた使者のことです。(ガラテヤ、1;13~17)にはパウロがキリスト者を迫害することから、キリストに召されて回心すると云う、自己紹介があります。コリント教会では「パウロは使徒なんかじゃあない」と云うある勢力の批判に対して「前略・・・私は私たちの主イエスを見たのではないか…後略」(Iコリント9;1)と反撃しています。使徒であることを問題にされては、キリストの生前、自分の肉眼でイエスに従ったことのないパウロも、霊で出会い導かれたイエスを持ち出さざるを得ないのです。(ガラテヤ1;1)には神からの恵みと選びによって、召し出された自分の使徒性を言っています。神のめぐみと選びとは、同じことです。選びは最大の恵みなのです。選ばれたその人が素晴らしいのではなく、伝える出来事の内容が素晴らしいから、恵まれているのです。パウロは召し出されて、異邦人に対する使者となりました。私たちはユダヤ人ではありません。異邦人です。パウロの言葉を大切に聞きましょう。パウロの使信と云うのは、啓示されたキリスト・イエスを、福音の内容として伝えることでした。パウロはこのダマスコ途上の自分ひとりの経験だけに頼ってキリストを述べ伝えたわけではありません。多くの人がキリストと出会ったその経験を共有して、客観的な事実としてイエス・キリストの啓示と共に宣べ伝えたのですが、自分に伝えられたその伝承(ケリュグマ)を告知の根幹としたのです。そのケリュグマのことを先ず、学びましょう。

エルサレム・ケリュグマ——イエスが復活された直後のエルサレムには、勿論殆どユダヤ人ばかりが住んでいました。大部分はエルサレムで育ったパレスチナ・ユダヤ人で、ごく小部分(15%位と云う推定もあります)のギリシャ語を語るディアスポラ・ユダヤ人も住んでいました。その人たちに対しておもに12弟子が告知した内容は次のようなことです。

1、イエスの復活は復活されたイエスの顕現を体験した弟子たちの証言する事実ですが、彼らは同時にその出来事は聖書(旧約)の約束を成就する出来事だと告知しました。すなわち神が終わりの日に成し遂げると約束された預言が実現したのです。イエスの復活によって終わりの時代が開始されたのです。 《復活のキリストの告知》

2、その終わりの日における神の支配を完成する為に、すぐに栄光のうちにキリストが来臨され、世界を裁かれることを告知しました。 《来臨のキリストの告知》

3、そのメシア・キリストであるイエスが十字架につけられて死なれたのは、その死を民のための贖罪の場にする神のご意志によるものであって、イエスをキリストと信じた者は、そのキリストの贖罪にあずかって罪が赦されることを告知しました。

《十字架のキリストの告知です》

4、復活してキリストとして立てられたイエスは、このイエス・キリストを信じる者に、聖霊を与えて下さる方であることを告知しました。

《聖霊によってバプテスマするキリストの告知です》。

5、イエスはダビデの子孫であり、メシア・キリストはダビデの子孫から出るという聖書の預言を成就する方であることを告知しました。 《ダビデ・メシアの告知です》

弟子たちが福音告知の活動を始めた時以後——すなわちキリストの復活以後——は、弟子たちは、イエスの生前の活動を語らず、死者の中から復活して、キリストとして立てられたことを証言し、このエルサレム・ケリュグマをユダヤ人や異邦人に告知しました。そのイエスの受難と復活がやがて他のイエス伝承と組み合わせられて、「福音書」として福音伝道に用いられるようになるのです。

「信仰・希望。愛」の展開の物語

第三部 福音書伝道から、パウロの福音活動に（その2） 附 福音と福音書

一方パウロが「ケリュグマ」として用いているのは、「キリストが、聖書に書いている通りわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また聖書に書いてある通り3日目に復活したこと、ケファに現れ、その後12人に現れたことです」

(Iコリント15：3～5)

また、「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば死者の中からの復活によって神の子と定められたのです。この方が私たちの主イエス・キリストです」、(ローマ1：3～4)。このケリュグマは、パウロ独自のものではありません。始めのものはパウロが初めてエルサレムに行きペテロやほかの弟子たちと会った時に受けた「エルサレム・ケリュグマ」、あとのものはローマの信徒たちにパウロが手紙を送る前に、既にエルサ

レムから伝わっていたと考えられます。しかしパウロが実際に告知しているのは、エルサレムのキリスト信仰共同体が福音書の中でも盛んに用いた、ご生前のイエス伝承は一切使わず、また「人の子」と云う称号も一度も用いていません。彼は異邦人に遣わされた使徒ですから、異邦人の理解できないような言葉は使わなかった。パウロはもっぱら「イエスの十字架とキリストの復活」を語ることに専念したのです。と云ってもパウロの福音告知は、異邦人だけに向かったのではなく、まずユダヤ人にも向かったのですが(パウロが受けた裁判の中でパウロが述べた証言でも、その証言の相手はユダヤ人です)、福音はユダヤ人向けと異邦人向けの二つある筈はありません。パウロの福音告知は使徒言行録の中でルカも一部取り扱っていますが、それは矢張りルカ自身の見解も入って書かれていますから、パウロの福音告知を学ぶには彼の手紙が最も大切です。その中から学びましょう。

「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです」(ガラテヤ2；16)。

「義とされる」とは神から正しい者と認められて、神に所属する者、神との交わりに生きる神の民と認められることです。「キリストの信仰」とは、「キリストへの信仰」と云うようなキリストを対象とする人間の姿勢とか態度ではなく、キリストに自分の全存在を投げ入れ、キリストに捉えられて、キリストと一つになって生きる人間の姿を指します。

「しかし今や律法とは別に、神の**「義が現れた」**」(ローマ3；21a)。パウロは、ローマ書において、まず、ユダヤ人も異邦人も、神に背いている現実を指摘し、その後キリスト・イエスの出来事において、実現した救いについて如上のように述べました。**神の義が福音によって(福音の中に。福音において) 現れたという宣言はローマ書全体の「主題です」**(ローマ1；16～17)。

パウロのアンテオキキアにおける福音活動など、生涯の宣教活動に触れることは大切な観点ですが、彼の伝道旅行を詳述する余裕はとてありませんので、いよいよこれから彼の説く福音の内容について触れたいと思います。詳述する力もありませんし、スペースもありませんので、初めに書きました通り、ほんの『さわり』だけに過ぎませんが、彼の「福音伝道」の内容の説明をおもに取り上げたいと思います。

「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じる者すべてに救いを到らせる神の力だからです」(ローマ1；16)。

パウロは福音を恥としないで、命がけでその福音を宣べ伝えるのは「**救いに到らせる神**

の力」だからだと云います。パウロの福音理解の核心です。これが福音の本質だと云うわけです。福音は、主イエス・キリストを告げ知らせる言葉です。但しこの言葉は単なる情報伝達という言葉ではありません。福音と云う言葉の質は「**救いに到らせる神の力**」なのです。「**神の力**」なのです。

パウロは「わたしは福音を恥としない」と云った直後に「福音は神の力だから」と理由をつけます。力には大きさだけでなく、力の向かう方向があります。神の力は信じる者の内に働いて救いに到達させるものである(フィリピ2 ; 12~13)とパウロは理解しているのです。

福音は「すべて信じる者にとって」救いに到らせる神の力です。この「すべて信じる者に」と云う句は、「救いに到らせる神の力」が働く場を示しています。福音は言葉です。神からの語りかけの言葉です。語りかけられた言葉を聞かなければ人格と人格との関係は成り立ちません。このことを信じ受け入れて初めて人格間の結びつきが成立し、その場において霊的な力が働くようになります。神の力は霊的な力であり、神と人間との間に働く力ですから、「信じる」と云う場において働くようになります。その時代、ユダヤ人は異邦人を軽蔑していました、その異邦人が福音を「信じる」ことによって、「救いに到らせる神の力」を頂いて救われる、というのです。確かに福音は先ずユダヤ人に来ました。ユダヤ人は「あなた方はモーセの律法では義とされなかったのに、信じる者は皆、この方によって義とされるのです：(使徒13 ; 38~39)と云う使信を聞くようになりました。この福音を聞いて信じるなら、ユダヤ教徒でなくとも「救いに到らせる神の力」に与るのだという事です。これはユダヤ教の存在価値を否定しかねない重大な革命的宣言です。ユダヤ人であるパウロは、ことの重大さをよく自覚していました。だから異邦人が異邦人のままで、福音を信じることによって、「救いに到らせる神の力」を受ける根拠を、次のように説明します。

「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『義人は信仰によって生きる』と書いてある通りです」。(ローマ1 ; 17)。

パウロは神が人間を救われる働きを「**神の義**」と表現しています。ユダヤ教において(そして現代の人間の正義観においても)、義は様々な意味で用いられている言葉ですが、ここでは神が人をご自身との交わりを持ち得る者にならせて、受け入れて下さる神の働き、すなわち神の救いの働きを指しています。当時のユダヤ教は、ユダヤ教の律法、殊に割礼を受けなければ、ユダヤ教の信徒になれず、救われないと定めていました。割礼を受けることは、「律法によってのみ義とされようとする」行為であり、キリストの十字架や復活を、ないがしろにするものでした。神がキリストにおいて成し遂げられた最終的な救済のわざを、不十分だとするもので、「キリストとは縁もゆかりもない者」となってしまうことです。だからキリストにおいて与えられている無条件・絶対の恩恵から脱落する者となるのです。

勿論この第三部も、市川喜一師の「パウロによる福音書—ローマ書講解」「福音の史的展開」
「パウロによるキリストの福音」の内容を記載させて頂きました。感謝。

第 2 部の記載において、次のような間違いがありました。これはすべて、著者バルナバ畑
野栄一の実責任です。お詫びして次のように訂正いたします。

~~~~~

訂正箇所 第 2 部 イエスの神の国宣教から、弟子たちの「福音伝道」へ

1、 小見出し、「安息日の論争」 14 行目

誤記 その中の(すべちに)完成

正記 その中の(すべてを)完成

2、 小見出し、(同上)

誤記 19 行目 最後の字「神」

正記 「人」